

Hem21 NEWS

公益財団法人
ひょうご 震災記念21世紀研究機構
ニュース

「Hem21」は、ひょうご震災記念21世紀研究機構の英語表記である
Hyogo Earthquake Memorial 21st Century Research Instituteの略称です。

令和8年(2026) 3月 Vol.116

CONTENTS

- 1～2 ころのケアシンポジウム
「災害で大切な人をなくされた方への支援」を開催
- 3～4 津波から命を守るために
一東日本大震災15年の
教訓を次へ
- 5～7 人と防災未来センター
MIRAI
- 8 HAT神戸掲示板

ころのケアシンポジウム 「災害で大切な人をなくされた方への支援」を開催

兵庫県ころのケアセンターでは、「ころのケア」に関する先進的な知見を情報発信する取り組みの一環として、令和7(2025)年12月17日(水)に、ころのケアシンポジウムを開催しました。シンポジウムでは、当センターの亀岡智美副センター長のあいさつの後、基調講演、パネリスト3名の講演と、パネルディスカッションが行われました。会場参加とオンライン視聴を合わせて約300人が参加し、終了後のアンケートでは、95%以上の人から高評価を得ました。そのときの内容をご紹介します。



悲嘆は、故人との関係性や死の状況、その後の経過など、死別までの「文脈」に大きく影響されます。また、遺族のアイデンティティが脅かされ、死別後は社会的なネットワークが一変するため、これからどう生きていけばよいかわからなくなる場合が少なくありません。また、報道の映像によってフラッシュバックが起こったり、命日や故人の誕生日などには、「記念日反応」によって、気持ちが沈みややすくなります。また、災害では、生き残ったことによる「生存者罪責感」(Survivor's Guilt: サバイバーズ・ギルト)が生まれやすいことも特徴です。

悲嘆反応やトラウマ反応は、多くの場合、自然に和らぎますが、症状が慢性化・長期化し、遷延性悲嘆症(複雑性悲嘆)やPTSD(心的外傷後ストレス症)などにより、専門的な治療が必要となる場合もあります。当センターでは、遷延性悲嘆症に対して、全16回の認知行動療法プログラムを提供しています。

グリーフケアの基本は、まずは安全に悲しめる関係づくりが大切で、支援する側は、悲しみを抱えながらも遺族が前を向いて生きていけるよう支えていきます。強風で折れた木に対し、適切な「手当て」をすることで木が再生する力を取り戻すように、忍耐強く温かい支援を続けることで、孤立を防ぎ、レジリエンス(回復力)を醸成することが、遺族支援の最も重要な点といえます。

1. 基調講演

「災害による喪失と悲しみ(グリーフ)への支援」

瀬藤乃理子 兵庫県ころのケアセンター上席研究主幹

基調講演では、阪神・淡路大震災と東日本大震災の支援経験から、災害遺族の支援の考え方と具体的な支援方法、その留意点が述べられました。

災害で愛する人を亡くすことは、「突然の死別」であり、同時に大勢の人が亡くなり、家族のみならず地域コミュニティ全体が大きなダメージを受けます。これは「集合的トラウマ」とも呼ばれており、その回復においては、「個人」の回復に目をむけるだけでなく、「地域全体」の回復を考える必要があります。

また、「喪失=なくす」という言葉には、人を「亡くす」という意味と、物を「失くす」という両方の意味がありますが、災害では、喪失したかどうかも不明瞭な状態が、しばしば起こります。例えば、生きていたのかいないのかもわからない「行方不明」、生まれ育った町が災害によって全く変わってしまうといった「故郷の喪失」が代表的です。このような状況は「あいまいな喪失」(Ambiguous Loss)と呼ばれており、非常に強い苦悩をもたらすことがわかっています。

2. パネリスト講演

(1) 「医療を受診する災害遺族の支援について ～福知山線脱線事故遺族の事例を中心に～」

村上典子 神戸赤十字病院心療内科部長

パネリスト講演では、まず、心療内科医として、長く病院で遺族の診療をされてきた村上さんから、JR福知山線脱

線事故の遺族等に対する治療経験や、その経過などが報告されました。

災害急性期の災害遺族支援の課題の1つとして、「トリアージ」があります。災害時は、効率的な救命治療のため、傷病者の重傷度に応じ、色分けされたタグによって、救急搬送の優先順位を決定します。JR福知山線脱線事故においても、トリアージが実施されましたが、自発呼吸がなく、救命の見込みもないため、病院に搬送されなかった「黒タグ」をつけられた人たちがいます。村上さんは、そのような人たちの遺族が、愛する家族が搬送されなかった無念さをかかえて苦しんでいたことを述べ、日本DMORT(災害死亡者家族支援チーム)研究会を立ち上げた経緯を報告しました。そして、遺体への対応、遺族や医療スタッフへの心のケアなどに取り組んだ結果、救急医療関係者からも高い関心を得て、医療側の意識を変えるきっかけとなりました。

災害は、身体的、精神的、社会的、スピリチュアルな全人的な苦痛をもたらします。今後も、さまざまな職種や機関と連携し、災害遺族支援の充実をはかりたいと述べられました。

(2) 「東日本大震災後、アルコール関連問題がある地域の遺族への支援について」

米倉一磨 相馬広域こころのケアセンターなごみセンター長

遺族の中には、災害後、さまざまな理由で、医療機関につながらないまま、アルコール依存などから抜け出せず、自殺企図を繰り返す方がおられます。2人目のパネリストの米倉さんは、東日本大震災で原発事故の影響を大きく受けた福島県沿岸部で、地道に続けてこられた遺族の支援について講演されました。

米倉さんは、息子が避難中に自ら命を立ち、アルコール依存症になった男性に対し、粘り強い訪問支援を続けており、その取り組みと、遺族が変化していく様子を記録したドキュメンタリー映画を紹介し、長期的な支援の成果を報告しました。

SOSを自発的に発信できる被災者は、医療に結びつきやすく、比較的早期に回復しやすいですが、SOSを出せない被災者は、地域の中で孤立し、支援に結びつきにくい傾向があります。また、自分だけ生き残った罪責感が強く、支援を受け入れることが難しいケースもあり、そのような人々を地域でどのように支えていくかが課題であると述べました。

避難中に息子が自死し、依存症となったAさん



Amazon にて好評発売中

公開中(1万人突破)
ドイツの国際映像祭
「World Media Festivals」で銀賞受賞!!

※紹介にあたりご本人、映画会社に了承済

災害時の遺族支援は、地域の中で定期的・継続的な見守りを続け、医療・介護・福祉の資源を活用しながら、心理教育的アプローチや集団支援につなげていくなど、総合的な支援が必要であり、地域の中で「つながりを作る」共同作業の重要性が語られました。

(3) 「兵庫県こころのケアセンターで悲嘆の専門治療を受けるまで、そしてその後」

高井 千珠 阪神・淡路大震災遺族

西宮で被災した高井さんは、阪神・淡路大震災で1歳半の息子さんを亡くされました。死別後は、後悔と罪悪感から死ぬことばかり考えていた時期など、困難な時期が幾度もありました。東日本大震災の時には、報道の映像でフラッシュバックが起り、当センターで遷延性悲嘆症の治療プログラムが始まりました。

治療初期に設定した「最も困難な課題」である『息子のビデオを観ること』を終盤まで取り組めないままでしたが、主治医からの「この治療中にビデオを観られなくてもいいですよ」という言葉に心が軽くなり、その後、娘さんの言葉がきっかけで、ビデオを観ることができました。その時、涙を流すことなく全てを観ることができたことに、ご本人自身がびっくりされたと言われました。また、「こんな可愛い息子が亡くなったのだから、つらくて苦しんで当たり前」、「悲しみが消えたわけではないものの、子どもたちと過ごした日々は、幸せだった」と、初めて温かい気持ちで振り返ることができたと話されました。

治療後、「息子の20歳のお祝いに絵本を制作し、息子の育児がやっと終わったように感じました。息子が『自分が死んだから、ママの人生を悲しい人生にした』と自分を責めることがないよう、今は明るく笑顔で生きようと思っている」と話され、「今は、つらいことがあったら、主治医の加藤先生のところへ行けばいいと思っています。私にとって、こころのケアセンターはお守りのような存在です」という言葉で締めくくりました。



3. パネルディスカッション

基調講演及びパネリスト講演の講師に、当センターの加藤寛センター長が加わり、パネルディスカッションを行いました。基調講演やパネリスト講演を踏まえて、サバイバーズ・ギルトをかかえる遺族や支援者の思いや、災害遺族支援の意義、情報発信の大切さなどが共有され、話し合われました。最後は、加藤センター長が、高齢化に伴い多死社会に向かっている今、悲嘆やトラウマによって支援を求めている人が多くいることを忘れず、本シンポジウムが支援のヒントになればよいと述べ、閉会しました。

津波から命を守るために ―東日本大震災15年の教訓を次へ ～ 21世紀減災社会シンポジウム、仙台で開催～

東日本大震災から15年の節目を迎えるにあたり、朝日新聞社、公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構の主催と河北新報社の共催による「21世紀減災社会シンポジウム」が1月23日、仙台市戦災復興記念館で開催しました。「津波から命を守るために～東日本大震災15年・次の巨大地震への教訓」をテーマに、基調講演、朗読、パネルディスカッションを通じて、震災の記憶と教訓を未来へつなぐ重要性が改めて確認されました。会場参加とオンライン配信を併用し、全国から多くの方々に参加しました。



基調講演

「東日本大震災に学ぶ～津波の脅威から身を守る～」

今村文彦 東北大学副学長・災害科学国際研究所教授



東北大学副学長で災害科学国際研究所教授の今村文彦氏が「東日本大震災に学ぶ～津波の脅威から身を守る～」と題して基調講演を行いました。

今村氏は、東日本大震災が地震・津波・原発事故という複合災害であったことを改めて確認した上で、津波のメカニズムについて科学的に解説しました。「津波は一定の猶予時間があるため、適切な判断と行動が取れば人的被害をゼロにできる。しかし、それが非常に難しい」と指摘し、津波避難の課題を浮き彫りにしました。

また、2022年のトンガ火山噴火による津波や、昨年7月のカムチャツカ半島沖地震に伴う津波警報など、近年の事例も紹介。「津波被害は決して過去の出来事ではなく、今後も向き合うべき現実のリスクである」と警鐘を鳴らしました。

今村氏は、津波避難の要点として「津波スクリプト」と「避難認知マップ」の作成を提案しました。「災害発生前から発生後までの時系列的な変化を自分の中でイメージし、スクリプトとして書き出してみることで、次の行動が判断しやすくなる」と説明。また、「頭の中にある認知マップを書き出し、実際に歩いてみることで、正確な情報に修正していく。正確な情報はより正確な行動につながる」と強調しました。

朗読

「Team Sendai」 仙台市職員有志の自主研究グループ

続いて、仙台市職員などによる自主研究グループ「Team Sendai」が、震災時の体験を朗読という手法で伝えました。避難所での町内会長の奮闘、現場で汗を流した保健師の記録、そして当時の仙台市長が語った「神戸から受け継いだバトンをもう一段上げて次へ」という決意。公的な記録には残りにくい、しかし確かに今につながる大切な記憶が、丁寧に語られました。

「民話や祭りなどのように、人が人に直接伝えることで、100年後、1000年後にまで伝えることができる」というメッセージは、会場に深い感動を呼びました。



パネルディスカッション

コーディネーター

御厨 貴 機構研究戦略センター長

パネリスト

矢守 克也 京都大学防災研究所副所長・教授

佐藤 仁 前南三陸町長

丹野 祐子 津波復興祈念資料館「関上の記憶」代表

越中谷郁子 河北新報社記者



矢守 2012年3月31日に公表された南海トラフ地震の新想定で、全国最悪の津波想定34メートルが発表された高知県黒潮町での取り組みを紹介しました。

当時、現地の住民には絶望感が広がっていたそうですが、矢守氏は、「大きな災害に立ち向かおうとするからこそ、小さな、今すぐできることから始めることが重要」と提案。高齢者を中心に「玄関先まで出てくる」ことをゴールとした避難訓練や、「防災リハビリ教室」で高齢者が6分間歩けるようになることを目指す取り組みを紹介しました。そのような取り組みを、地元自治体や地域の方と続けた結果、最初は「大津波 来たらばともに死んでやる 今日も子が言う足なえ我に」という短歌を詠んでいた高齢者も、「この命 落としはせめと足なえの 我は行きたり避難訓練」と読むようになるほど前向きな気持ちに変わり、津波注意報等が発表された際には、実際に避難するまでになったそうです。「防災と健康づくりは結びつけるといふより、ほとんどイコールになりつつある。防災と聞いた途端に背を向けるような方に、どうやって防災の方を向いてもらうか。ランニングやスポーツ、あるいは健康づくりという入口から防災につながる発想が重要」と強調しました。



佐藤 震災当日に町防災対策庁舎で津波に巻き込まれながらも生還した体験を振り返りました。「なりわいの場所は様々であつても住まいは高台に」を基本方針として、防災集団移転促進事業を実施し、高台移転を完了させた経緯を説明しました。

佐藤氏は、事前防災の重要性を強調。「行政には限界があるということ、日頃から町民の皆さん、市民の皆さんにお話をしていくことが大事。自分の命が助かってこそ他人の命を助けることができる」と述べました。また、青山学院大学の元駅伝選手と協働で進めている「ランニング×防災」プロジェクトなど、新しい形での防災啓発活動も紹介しました。

佐藤氏は避難所の環境改善についても言及。台湾東部地震での避難所の様子を例に挙げ、「日本の避難所は関東大震災から100年間一切変わっていない。一番大変な思いをした人が一番大変な生活を強いられる。このままでいいのだろうか」と問いかけました。



丹野 東日本大震災の津波で中学1年生の息子を亡くした母親として、語り部活動を続ける思いを語りました。

「なかったことにされたくない。その思いでこの15年ずっと歩み続けてきた。町が綺麗になってそれで終わりなのか。なかったことになるのか」という丹野氏の言葉には、会場全体が静まり返りました。

丹野氏は、阪神・淡路大震災の伝承活動を例に挙げ、「30年を機に語ることをやめた人もいる。多分私も30年が限界だろうと思っている。東北は今15年目。つまり折り返し地点である。ここが踏ん張り時」と述べました。

また、次世代への継承について、「伝えるということには色々な形がある。お芝居、朗読、マラソンといった楽しい話題の中に、ちょっとだけ震災のエッセンスが入っているようなことがあってもいいのではないかと提案。名取市の名取北高等学校演劇部が震災体験を演劇にして全国大会で発信している例などを紹介しました。

丹野氏は「宮城県は40年に一度の割合で何らかの災害に見舞われている。25年後、また宮城県に大きな災害が起きてしまうのではないかと。決して1000年に一度でも、未曾有でも、想定外でもなく、起こり得る災害は必ずまた来る」と述べ、継続的な備えの重要性を訴えました。



越中谷 新聞を活用した防災教育の取り組みを紹介しました。中学生を対象とした「河北防災記者」プロジェクトでは、生徒たちが被災地を訪れて語り部の話を聞き、それを新聞記事にまとめて地域住民に発表する活動を続けています。

「震災を実際に経験していない中学生でも、学んだことを伝えることができる。震災を知ることは備えの第一歩である」と越中谷氏。「新聞には記録するという役割があるので、それを継続するしかない」と強調しました。

越中谷氏は、ある校長先生の問いかけを紹介しました。「学校の避難訓練に主体的に取り組んでいるか。先生の言われたとおりに動いていないか。そこに自分たちの意見や考えは反映されているか。何も考えずにただ避難訓練をするのでは自分の命を守れない」

総括

最後に、御厨コーディネーターは、「東日本大震災の津波という、この15年間の経験が、時間が過ぎるにつれて深掘りされている。語り部の問題も、避難訓練の問題も、最初の時からあった問題」「この東日本大震災から生まれてきた教訓は、時間が経つにしたがって深掘りされてきた。そして阪神・淡路大震災からこの東日本大震災へ、今度は南海トラフ地震へと、災害の教訓をきちんとつないでいくことが、我々のやるべき最大のことでないか」と締めくくりました。

シンポジウムを通じて、東日本大震災から15年を経て、津波防災の取り組みが着実に深化・進化していることが確認されました。ハード面の整備だけでなく、避難訓練の革新、健康づくりと防災の融合、多様な伝承手法の開発など、新しい防災の形が生まれています。「人の口から人の心へ」一震災の記憶と教訓を次世代につなぎ、南海トラフ地震など将来の巨大地震に備えるため、継続的な取り組みの大切さが、改めて確認されたシンポジウムとなりました。



「月刊神戸っ子」は、
神戸・阪神間のより豊かで美しい暮らしのための
道しるべです。

■定価 500円(本体 455円+税10%)
■発行 服部プロセス株式会社 神戸っ子出版事業部
神戸市長田区東尻池町2-9-17 TEL.078-686-0585



公式ホームページ



公式Instagram

震災資料のメッセージ2025「命の水」の開催について

令和7年度後期は、「命の水」をテーマとして、資料室企画展を開催しています。「震災資料のメッセージ」とは、人と防災未来センターに寄贈された一次資料(震災当時に被災したり、使用された現物)を、年度ごとのテーマに沿って紹介するスポット展示です。

阪神・淡路大震災でライフラインが途絶した時、被災者を苦しめた様々な困難の一つが水不足でした。基本的な給水でさえ難しくなったその時期、各地から被災地に届けられた支援物資のなかには、「水」もありました。人と防災未来センター資料室には、誰かの命を支えるために届けられた当時の「水」が、そのまま入った状態で保管されている容器もあります。命を繋いだ当時の「水」は、「水」を届けた人々の思いや、平素には当たり前であるライフラインの大切さについて今も語っています。

〈開催期間〉 令和8年5月24日(日)まで

〈展示場所〉 西館3階 有料ゾーン

■ 問い合わせ：人と防災未来センター西館5階 資料室

TEL:078-262-5058 FAX:078-262-5062

※資料室はどなたも無料でご利用いただけます
(開室時間 9:30-17:30、月曜日閉室)。



給水車に並ぶ人々
1995/01/18 港島中町3丁目
(撮影:河本功氏)



給水の為並ぶ人々
1995/01/20 明石市中崎1丁目 市役所
(撮影:明石市役所広報広聴課)

企画展「地震・火災・感震ブレーカー ～予防しよう!通電火災」開催中

人と防災未来センターでは、令和8年5月24日(日)まで、企画展「地震・火災・感震ブレーカー ～予防しよう!通電火災」を開催しています。

これまでの地震災害において電気火災が多発していることから、通電火災を防止する感震ブレーカーについて、その種類や設置方法を解説したパネルや動画及び感震ブレーカーの実物展示などを行っています。この機会にぜひお越しください。

〈期間〉

令和8年5月24日(日)まで

〈会場〉

西館2階防災未来ギャラリー
(有料ゾーン)



展示会場



感震ブレーカー

令和7年度(2025)年度 災害対策専門研修「エキスパート特設演習」を開催しました

人と防災未来センターでは、行政に求められる幅広い災害対応の課題等について深く掘り下げて考えていくために、テーマや対象者を限定した災害対策専門研修「特設コース」を実施しています。今年度のエキスパート特設演習では、避難により守った命をつなぐために必要な行政の被災者支援について、避難所を中心に学び、考える研修を1月20日(火)に実施しました。研修参加者からは、「読みづらいつ思っていたスフィアハンドブックの使い方がわかった。」「スフィア基準の数値指標ではなく、その本質的な考え方を学ぶことができた。」「発表で自身の考えを言うことで理解を深め、他者の意見を聞くことで発見をし、今後に向けて取り組むことを明確にできたと思う。」「他の市町の職員の方々と交流ができ本当によかった。」などの感想が寄せられました。



講義の様子



ワークショップの様子



令和7(2025)年度 災害対策専門研修トップフォーラムを島根県で実施しました

トップフォーラムは、人と防災未来センターが開催地の都道府県と共催で行う災害対策専門研修であり、市町村長の危機管理能力の向上を目指すものです。センターが開設された平成14(2002)年度以降毎年開いており、令和8(2026)年3月までに累計全国40道府県で実施しました。

今年度は8月の佐賀県、11月の秋田県に続き1月26日に島根県で開催し、19市町村が参加しました。

第1部は各講師が地域の災害特性やリーダーが持つべき災害への心構え等について講義を行い、県知事も参加され熱心に聴講されました。第2部の演習では、市町村長等が4班に分かれ、地震の発生を想定したワークショップを行いました。

演習の最後には、各班の代表者がそれぞれの班で協議した災害対応方針について、当センターのOBであるリサーチフェロー等が演じる記者役3人に対して模擬の記者会見を行いました。記者役の3人は、元読売新聞編集委員の大学教授、NHKの元アナウンサー及びNHK松江放送局の記者で構成され、模擬記者会見の内容は極めて実践的なものとなりました。

アンケートでは、「これまでの防災対策に加え、改めて気づいたこと、今後力を入れるべきことへの示唆が得られた。」「模擬記者会見はそこに向けてのプロセスも含め多くの気づきがあった。」等の意見を頂きました。

トップフォーラムは、毎年度3都道府県で実施しており、来年度も引き続き実施していきます。



講義の様子



ワークショップの様子

「BEYOND 30+(ビヨンド・サーティー・プラス)大交流会」を開催しました

阪神・淡路大震災から30年。“あの日”の悲劇を繰り返さないために、震災を検証し、次世代に伝え、次の災害に教訓を活かすために、これまで「メモリアル・コンファレンス・イン・神戸」「災害メモリアルKOBE」「災害メモリアルアクションKOBE」と活動を続けてきました。

震災から30年の節目を迎え、この30年間の活動を通じて向き合ってきた挑戦をあらためて問い直し、未来へと進む力へと変えていく企画として、新たに「BEYOND 30+」(ビヨンド・サーティー・プラス)の取り組みがスタートしました。

今年度のイベントとして、令和8年1月10日(土)に人と防災未来センター 西館1階 ガイドンスルームにて「BEYOND 30+ 大交流会」を実施しました。

開会にあたり、BEYOND 30+企画実行委員会委員長の関西大学社会安全学部 奥村 与志弘先生からご挨拶いただいた後、今回のイベントの企画趣旨についてご説明いただきました。

つぎに災害の語り継ぎや防災・減災に関する活動を行っている団体、学校、企業など、合計14団体による活動紹介セッションを実施しました。各参加団体は、ポスターや製作物などを用いて、それぞれの取り組み内容を紹介しました。

パネルディスカッションは、「BEYOND 30+ を考える」をテーマに開催されました。BEYOND 30+企画実行委員会副委員長の京都大学防災研究所巨大災害研究センター中野 元太先生をコーディネーターとして、中野先生のサポート役の人と防災未来センター研究部 南研究員、学生や生徒のパネリスト4名と企画実行委員5名が登壇しました。会場の参加者にも意見を紙に書き留めてもらい、壇上から気になる意見に対して質問を行うなど、会場も巻き込んで活発な意見交換が行われました。

現在の実行委員会は大人のメンバーで構成されていますが、中学生・高校生・大学生、初参加者も歓迎し、参加者の「やりたい」という気持ちに全力で寄り添っていきたく考えています。今回は一年目のトライアルということで、この企画は今後十年間続きます。今回、参加者の皆さんはもちろん、新たにご参加いただける方もお待ちしております。皆さまの新しい取り組みやアイデアもぜひお持ち寄りいただき、それらを共有し、新しい仲間とつながることで、次世代の防災の未来を共に築いていきたいと考えています。

最後に、10年後には大規模なホテルを会場として、過去10年間の参加者を集めて数千人規模のイベントを開催できるようにすることを目標とし、継続的に活動を拡大していきたいとの提案がありました。



開会挨拶



活動紹介セッション



パネルディスカッション



(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構 **阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター** <https://www.dri.ne.jp/>

開館時間

9時30分～17時30分(入館は16時30分まで)

入館料金

大人:650円(500円) 大学生:450円(350円)

東館のみ観覧の場合

大人:300円(250円) 大学生:200円(150円)

高校生・中学生・小学生:無料

※()内は20名以上の団体料金

※障がい者、70歳以上の高齢者割引有

※毎月17日は、入館無料

(17日が休館日の場合は、翌18日となります)

休館日

毎週月曜(月曜が祝日の場合は翌平日)、12月29日～1月3日

※ゴールデンウィーク期間中(4月28日から5月5日まで)は無休

交通

鉄道

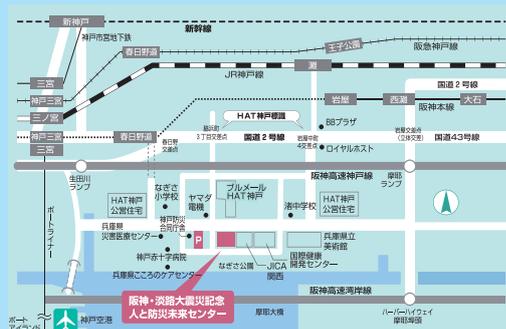
- 阪神電鉄「岩屋」駅、「春日野道」駅から徒歩約10分
- JR「灘」駅南口から徒歩約12分
- 阪急電鉄「王子公園」駅西口から徒歩約20分

バス

- 三宮駅前から約15分
- 阪神高速道路神戸線「生田川」ランプから約8分
- 阪神高速道路神戸線「摩耶」ランプから約4分
- 阪急・阪神・JR「三宮」駅から約10分
- 有料駐車場あり

メルマガ センターの活動や企画展開催の情報を配信中

友の会 個人会員 3,000円/年 法人会員 一口50,000円/年



#人と防災未来センター

HAT神戸 掲示板

兵庫県立美術館 アンチ・アクション 彼女たち、それぞれの応答と挑戦

本展では『アンチ・アクション』(中嶋泉[本展学術協力者]著、2019年)のジェンダー研究の視点を足がかりに、1950～60年代の日本の女性美術家による創作活動を見直します。アクション・ペインティングが評価の中心となった時代に別のかたちで応答し、独自の抽象表現を展開した14名の作品およそ120点を紹介。半世紀以上を経ても驚くほど新鮮な「彼女たち」それぞれの挑戦にご注目ください。

- 開館時間 10:00-18:00(入場は閉館の30分前まで)
- 会場 兵庫県立美術館 1階展示室
- 休館日 月曜日 [ただし5月4日[月・祝]は開館]
- 会期 2026年3月25日[水] - 5月6日[水・振休]
- 観覧料 一般1,600円、大学生1,000円、70歳以上800円、高校生以下無料
※一般以外は要証明



チラシ 掲載作品:山崎つ子《作品》
1964年 芦屋市立美術館蔵
© Estate of Tsuruko Yamazaki,
courtesy of LADS Gallery,
Osaka and Take Ninagawa, Tokyo



宮脇愛子《作品》
1967年 撮影:中川周

JICA関西 国際協力?SDGs?JICAかんさい地球ひろば! 大型LEDビジョンで世界をより身近に!

JICAかんさい地球ひろばでは、SDGsや国際協力、世界・異文化について理解を深め、考え、動き出すきっかけづくりのための、見て・触れる常設展や企画展を無料でご覧いただけます。「ひょうごフィールドパビリオン」に認定されているJICAかんさい地球ひろばで、SDGsの達成に向け自分にできることを考えてみませんか。現在、大阪・関西万博でのJICAの様々な取組について、実際に会場で使用されたものも展示してご紹介しています。また、併設しているJICA関西食堂では、世界の料理をご提供しています。皆さま、お気軽にお立ち寄りください。



1階の大型LEDビジョンで「SDGsが達成された世界」と「SDGsが達成されなかった世界」の2つのオリジナル映像コンテンツをご覧いただけます。それぞれの2050年の世界を観て、SDGsの達成期限である2030年までに自分にできることを考えてみませんか。また兵庫の魅力満載のひょうごフィールドパビリオンPR動画もお楽しみいただけます。



JICA関西食堂について

- 営業時間: (昼) 11時30分から14時まで (夜) 17時30分から21時まで
※各終了30分前ラストオーダー
- 定休日: 年中無休(年末年始を除く)
※メニューや営業日時詳細はJICA関西食堂ホームページをご確認ください。
<https://www.jica.go.jp/domestic/kansai/office/restaurant/index.html>



JICA関西Instagram

■問い合わせ TEL 078-261-0341
その他、詳細はJICA関西ホームページをチェック!
<https://www.jica.go.jp/domestic/kansai/index.html>



JICA関西HP

日本赤十字社 兵庫県支部 令和8年度「個人住民税税額控除対象寄付金」および「法人税法指定寄付金」のご案内

令和8年度の「個人住民税税額控除対象寄付金」および「法人税法指定寄付金」の受付が開始されます。これらの寄付金は、総務大臣の承認もしくは財務大臣が指定する日本赤十字社の事業に対する寄付金となり、毎年4月1日から募集をしています。

日本赤十字社へのご寄付は、その公益性から税制上の優遇措置を適用することができ、個人住民税税額控除対象寄付金では、個人住民税の税額控除および所得控除を受けることが可能です。また、法人税法指定寄付金では寄付金の全額を損金算入限度額によらず損金算入することが可能です。

なお、それぞれの寄付金として適用されるには一定の条件や制限がございますので、詳細は下記の二次元コードより税制上の優遇措置をご確認のうえ、ぜひご協力をお願いいたします。

「人間のいのちと健康・尊厳を守る」赤十字の活動は、皆さまからお寄せいただく活動資金によって成り立っています。活動資金へのご協力をよろしく願っています。

※日本赤十字社の活動資金にご協力いただくと、金額に応じ、税制上の優遇措置や紺綬褒章・大章表彰等の対象となります。
<https://www.hyogo.jrc.or.jp/donate/>



◎問い合わせ
TEL 078-241-8921(振興課)

赤十字 兵庫 検索



Hem21 NEWS
vol.116

令和8年3月発行

(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構
〒651-0073
神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2(人と防災未来センター)
<https://www.hemri21.jp/>

当機構は、以下の組織で構成しています。

- 管理部
TEL 078-262-5580
FAX 078-262-5587
- 人と防災未来センター
TEL 078-262-5050
FAX 078-262-5055
- 研究戦略センター
▶研究調査部
TEL 078-262-5570
FAX 078-262-5593
- ▶学術交流部
TEL 078-262-5713
FAX 078-262-5122

●こころのケアセンター
〒651-0073
神戸市中央区脇浜海岸通1-3-2
TEL 078-200-3010
FAX 078-200-3017

ニュースレターに関するご意見・感想を機構までお寄せください